

タイトル

『推しの上位互換が僕ですか？』

ログライン

推しに近づくために  
アイドルになったはずが、  
推しの「上位互換」になって  
嫌われた！？

元アイドルオタクが、推しに「大好き」と  
言われるために奮闘する  
推し活アイドルストーリー



推しの  
上位互換が  
僕ですか？

あらすじ

男性アイドルグループ「starlight」のメンバー、天上麗人（18）の大ファンである影山陽太（18）。

麗人に近づくために「starlight」の新メンバーオーディションを受け、見事合格。

憧れの推しと同じグループになり幸せ絶頂のはずが、麗人から「俺お前のこと嫌いだから」と言われてしまう。

アイドルになるために、陽太は麗人の踊り方・歌い方を研究し、見た目も麗人を参考に垢抜けた。

一方、麗人は最近パフォーマンスのクオリティの低下や、素行の悪さから人気が下降気味。

ファンからは同じような見た目、パフォーマンスでも陽太の方が上回っているため、陽太は麗人の「上位互換」だと評価されているのだ。

「下位互換」となった麗人は、陽太を敵視するように。意図せず麗人に嫌われてしまった陽太は絶望する。

そして事務所からも、同じようなアイドルは二人もいらないとどちらか一方をクビにすると宣告される。

家計を支えるためアイドルになった麗人は絶対にクビになるわけにはいかない。

陽太は麗人のために自分がアイドルを辞めようとするが、プライドの高い麗人が不戦勝を許さない。

そこで陽太は、麗人の人気を取り戻すために引き立て役に徹しようとする。

推しに「大好き」と言ってもらうため、同じグループで活動しながら麗人を応援する“推し活”をする！

テーマ

## 「憧れの人がいることの強さ」

- ・やりたいこともないフリーターだった陽太が、麗人に憧れる一心でアイドルという目標ができる
- 素人で辛い芸能界も、「麗人ならこうする」という気持ちで乗り切る
- ・最初は自分を「下位互換」にした陽太を嫌う麗人だったが、徐々に一生懸命な陽太の姿に惹かれる

自分の指針となる人があることで、人生を豊かにできるという素晴らしさを“推し活”を通して描きます。

## 登場人物

影山陽太（18）   メンバーカラー：ホワイト

特に楽しいこともなく惰性で生きていたが、ある日麗人をテレビで見てから生活が一変。推し中心の幸せな毎日を過ごすようになる。麗人に誘われたという思い込みからオーディションを受け、潜在的なポテンシャルによりアイドルとして覚醒する。

学生時代は根暗でクラスではいじめられていた。その影響でネガティブな性格になっている。麗人のためなら大胆なこともできる。

天上麗人（18）   メンバーカラー：ピンク

男性アイドルグループ「starlight」のメンバー。途中加入したが、圧倒的ビジュアルの良さからあっという間に他メンバーを追い抜き、グループのセンターに。幼い弟たちを養うためにアイドルになった野心家。

今野敦（22）   メンバーカラー：レッド

「starlight」の卒業メンバー。結成当初からグループのセンターとして活躍していたが、途中加入の麗人にセンターの座を奪われる。最初は麗人を可愛がっていたものの、段々と憎しみを抱くようになった。自分の目的のためなら何でも利用する狡猾さがある。

辻崎奏多（22）   メンバーカラー：ブルー

「starlight」のメンバー。敦が抜けてからはグループのリーダーになる。リーダーとしての責任感から、空回りしがち。

遠藤紬（20）   メンバーカラー：オレンジ

「starlight」のメンバー。アイドルという職業に対して誰よりもこだわりがあるため、グループの足を引っ張る麗人に対しては冷たい。

三森将生（20）   メンバーカラー：グリーン

「starlight」のメンバー。もともとジュニアアイドルとして活動していた紬に憧れ、アイドルの道に。そのため紬の言うことなら何でも聞く。

栗田恭介（19）   メンバーカラー：パープル

「starlight」の新メンバー。歌・踊り、バラエティ、何でもそつなくこなす。温厚そうに見えて、実は誰よりも腹黒い。夢はドームコンサートと、「starlight」のセンターになること。達成のために陽太を口車に乗せ、アイドルを続けさせる。

武田梓（21）

陽太のオタク仲間。SNSでは有名な敦ファン。推しに理想を押し付けがち。

坂木透（33）

「starlight」のマネージャー。自身も昔アイドルだったため、メンバーに寄り添う。

## 全体構成

### 1 話「推しと目が合ったからアイドルになりました」

男性アイドルグループ「starlight」のメンバー、天上麗人（18）の大ファンであるフリーターの影山陽太（18）。ある日行ったライブで、starlight の新メンバーオーディションの開催が発表される。その時麗人と目が合ったと思った陽太は応募を決意。未経験ながらも憧れの麗人のダンス、歌、キャラを研究し、見事にオーディションに合格。推しに近づけたと喜ぶが、麗人に「大嫌い」と吐き捨てられる。

最近パフォーマンスの質の低下や態度の悪さが目立ってきた麗人と、同じ歌い方踊り方でかつ好青年な陽太はファンから比べられ、陽太は麗人の「上位互換」だと言われていたのだ。推しに嫌われるくらいなら辞めると言い出す陽太だが、同じく新メンバーの栗田恭介（20）に諭され、同じグループで活動していく。

だが麗人のファンが陽太のところに流れたことで麗人の素行はさらに荒れ、ついには週刊誌にスキャンダル記事が掲載されてしまう。そこで事務所は麗人と陽太を呼び出す。同じグループに似たキャラは二人もいないと、今後の活躍次第でどちらか一方をクビにすると宣告。麗人を改心させるために出した宣告であったが、陽太は麗人のために自分が辞めると申し出る。だが麗人は断固拒否。正々堂々勝負の末、陽太をクビにすると宣戦布告する。

陽太は麗人の人気を取り戻すべく、同じグループで活動しながら麗人を推していくことを決意する。

### 2 話「“よたれい” 爆誕」

意図せず麗人に嫌われてしまった陽太だが、再び麗人の人気を上昇させることで好きになってもらえるのではないかと考える。そこで思いついたのが「セット売り」。あえて似た二人をセットにし売り出すことで、自分に集まった人気を麗人にも分けるという作戦だ。陽太は勝手に、陽太&麗人のコンビ、「よたれい」を結成する。

麗人に鬱陶しがられながらも、「よたれい」をファンに売り出すべく距離を縮めようと努力する。公私問わず麗人に付きまとう陽太。そして麗人の帰省にもついて行くことに。実家には幼い弟たちがいて、麗人は家族を養うためにアイドルになったと言う。推しの苦労話に感動した陽太は、麗人の人気を取り戻すことを強く決意する。

だが陽太の読みは完全にハズレ。セット売りにすることで麗人の欠点が目立ち、さらに二人の差が開いた。麗人はより陽太に敵対心を募らせる。事務所としても、これ以上の仲の悪化はグループに悪影響のため、「よたれい」を看過できない。そこで立ち上がったのは恭介だった。

### 3 話「元オタクがアイドルって無理ですか？」

恭介は新メンバーコンビでSNSを運用するなどし、陽太とのセット売りを始める。初々しい二人はファンに受け、あっという間にstarlightの鉄板コンビとなった。陽太は麗人とのコンビを推したいが、恭介に阻まれる。

順調だったかのように見えたが、事態は一変する。恭介が女性アイドルのファンであるとSNSで晒された。starlightのファン、女性アイドルのファン双方から批判が集まる。女性アイドルと繋がりたいという不純な動機でアイドルになったのではないかと疑われたのだ。女性アイドルを通して純粋に同じ職業に憧れた恭介は、世間の受け取り方に戸惑う。

一方、同じくファンからアイドルになった陽太は、同性ということもありファンに歓迎されている。そんな陽太を疎ましく思ってしまった恭介は、陽太と距離を取るように。恭介との関わり方に悩んだ陽太は、麗人に相談する。すると麗人は、元ファンである強みを持つ陽太を認めるような発言をする。

陽太から麗人の話を聞いた恭介は、ファンに向けて自分の胸中を告白する。真剣にアイドル業に向き合っている恭介の気持ちはファンに伝わり、事態は落ち着きを見せる。

恭介が立ち直ったことで安心する陽太。だが陽太はまだ恭介の本当の顔を知らない。恭介は既存メンバーを蹴落とし、は自分がセンターになろうという強い野心を持っていた。

### 4 話「光を奪ったのは君」

現センターの麗人を降ろし、グループの新センターになる野望を隠し持つ恭介。その計画のために、「陽太 VS 麗人」という構図を利用しようとしている。そんなことは知らず、陽太は麗人に認められたのではないかと有頂天になっていた。だがそんなことは一切なく、相変わらず冷たい態度を取られ落ち込む日々。

ある日starlightのドラマ出演が決まる。劇中登場するアイドルとして数分だけの出演だが、麗人のビジュアルをアピールするチャンスだと考えた陽太は気合が入る。撮影現場にはstarlightの元メンバー、今野敦（22）の姿が。グループ脱退と同時に劇団に移籍した敦は、俳優として駆け出しの状態だ。旧starlightの集結に歓喜する陽太だったが、当の本人、麗人は浮かない顔をしている。

撮影は滞りなく終了。だが陽太は麗人の様子が気になる。心配する陽太に、恭介は敦の本当の脱退理由を教える。元々、starlightのセンターは敦だったが、途中で加入した麗人にセンターの座を奪われた。そして人気も麗人に持って行かれ、敦は心が折れてしまった。どんなに努力しても麗人には敵わず、「麗人は顔だけ」と吐き捨て敦は脱退していった。その頃から、麗人は自暴自棄になり、落ち目だと言われ始めたのだった。

麗人と敦の確執を知った陽太は、二人の仲を修復することで麗人のやる気を取り戻せるのではと考える。

## 5 話「どの色がより輝くか」

麗人単体でドラマ出演が決まる。前回のドラマ出演で、麗人のビジュアルの良さが監督の目に留まったのだ。麗人の人気を取り戻すという作戦は成功したが、敦の嫉妬心を知った今、新たな火種になってしまふことを恐れる陽太。

ドラマの撮影現場には敦も来ていた。主役級の麗人に対し、セリフが数行だけの敦。さらに、麗人の演技は監督から絶賛される一方、敦は「これだからアイドル上がりは」と監督から叱責される。

陽太は多忙な麗人に代わって、麗人の弟たちの世話をするようになる。変わらず陽太を敵視する麗人だが、弟たちと楽しむ様子を見て、若干心を許すようになる。そして敦への思いをこぼす。麗人は敦に憧れて事務所に入り、同じグループになってからもずっと敦を目指してきた。そんな敦の脱退時の言葉に心が折れ、アイドル活動に身が入らなくなってしまったのだ。だが今は敦の気持ちがよく分かるという。図らずも麗人の「上位互換」となってしまった陽太は、何も言えない。

そんな中、事務所があるプロジェクトを発足させる。事務所内でオーディションを開催し、グループ合同の派生グループを結成させるというものだ。誕生したグループにはアリーナツアーや写真集の発売などが確約されている。もちろん、starlight も全員候補である。さらに事務所は、このオーディションの結果次第で、麗人か陽太の契約を切ると宣言する。

## 6 話「これだから素人は」

契約打ち切りの話が現実的になり、焦る陽太。自分が辞めると言うが、やはり麗人は納得せず、そんなことをすれば自分も辞めると言い出す。麗人にはずっとアイドルでいてほしい陽太は、成すすべがない。

また、合同オーディションにより、starlight のメンバー内にも不穏な空気が。ファンが減ったとはいえ、グループ内の一番人気は麗人である。starlight のメンバー、辻崎奏多（22）、遠藤紬（20）、三森将生（20）はそのことに少なからず嫉妬しており、今回のオーディションは大きなチャンスだ。同じグループとはいえ、全員がライバルになりぎくしゃくするようになってしまった。

仲の良い starlight が好きだった陽太は、starlight のマネージャー、坂木透（33）にオーディションの中止を提案する。アイドルにとっては過酷かもしれないが、絶大なプロモーション効果があり、事務所は中止にする気はない。そして坂木から、オーディションの開催を提言した人物の名前を聞き驚愕する。

残酷なオーディションの提案者は、恭介だった。陽太は恭介にオーディションの中止を求めるが、一蹴される。

## 7話「オタクってのは厄介ですからね」

事務所のグループ合同オーディションが始まる。オーディションの様子はSNSにて配信され、多くの注目が集まる。麗人は家族を養うために、なんとしてでもこのオーディションに合格しなければいけない。陽太も、麗人を勝たせるために彼を支えたいが、気が立っている麗人は陽太を遠ざける。

同じグループでもライバルとしていがみ合うようになった状況に、陽太は耐えられない。わざと下手に振る舞い、自分がクビになって逃げ出そうとする。だが街中でファンに声をかけられたことで思い直す。自分を応援してくれているファンのために、陽太は全力でオーディションに臨む。

starlight のメンバー全員が二次審査に進む。二次審査からはファンによる人気投票が大きく影響するため、ファンの間でも対立が起こるようになった。陽太はかつてのオタク友達、武田梓（21）から連絡を受ける。ファン時代、同じstarlightのファンとして仲良くなった梓だったが、梓の推しである敦が卒業してからは疎遠になっていた。久々に再会し、推しトークに花を咲かせる。そして陽太は、改めて自分を変えてくれた麗人への愛を自覚する。

第一回のファン投票の結果、陽太は最下位。それはSNSで拡散された、「陽太がファンに手を出した」というスキャンダルが原因だった。

## 8話「アイドルの呪い」

恋愛スキャンダルが出た陽太だったが、一切身に覚えがない。だがファンからの誹謗中傷が集まり、陽太は体調を崩してしまう。陽太のスキャンダルに思うところがある麗人は、発信元について調べることに。

覚悟はしていたつもりが、アイドルとして生きることの厳しさに打ちのめされる陽太。そんな陽太を心配した実家の母が上京してくる。引っ込み思案だった陽太が、麗人と出会いアイドルになったことを誇りに思うと言う母。だが落ち込む息子の姿を見て、田舎に帰って来るように勧める。陽太は麗人と、ファンとアイドルの関係に戻るべきかと思い悩む。

その頃麗人はスキャンダルの出所を突き止めていた。それは陽太を応援してくれていたはずの梓だった。さらにその裏には、敦がいた。脱退後の敦は、ファンだった梓と繋がり、自分の駒として使うようになっていた。推しのためなら何でもする梓は、敦の命令通り、陽太に接近し恋愛スキャンダルをでっち上げたのだった。麗人に問い詰められた敦は、麗人の心を完全に折るためだったと白状する。麗人が「陽太が落ちたから」オーディションに合格することで、今までの努力は否定され、プライドの高い麗人は立ち直れないと考えたのだ。そこまで自分を嫌うのかと涙を流す麗人に、敦は自身のアイドルへの執着を告白する。

## 9話「覚悟を決めたアイドルとオタク」

麗人は坂木に、アイドルを卒業することを相談する。憧れていた敦に失望したことから、もうアイドルを続ける気力がなくなってしまったのだ。坂木は元アイドルとして、アイドル卒業後の厳しい現実について語る。今まで家族のため、敦に追いつくため、アイドルを続けていた麗人だったが、今後何のために続けていくのかに思い悩む。

第二回のファン投票目前、陽太はアイドルを辞めようとしていた。それを止めたのは恭介だった。もうファンに合わせる顔がないと言う陽太を、麗人はSNSの生配信で弁明するように説得する。弁明ではなく、最後に謝罪をしてから辞めようとした陽太は、生配信に出演。そこで自分を変えてくれた麗人への思い、アイドルなった自分の思いを伝えるうちに、アイドルを続ける覚悟が決まった。

今回のファン投票では最終審査に進むアイドルが決まる。結果、starlight のメンバーで唯一陽太だけが落選。陽太は事務所に宣告された通り、クビになるということで田舎に帰る支度をする。そこに現れた麗人は、starlight を卒業すると言い出した。

## 10話「推しがいたから」

麗人の卒業宣言を受け、一旦陽太のクビは保留にされた。陽太は辞めないでほしいと懇願するが、麗人の中ではもう心が決まっている。陽太に助けを求められた恭介は、オーディションの最終審査生放送番組である計画を立てる。独自の調査で敦の悪事を見抜いていた恭介は、生放送で暴露しようとする。そしてあわよくば自分が正義のヒーローとして称賛されようと企てる。

そして迎えたオーディションの最終審査。見学に来た陽太が見守る中、麗人の最後の自己PR タイムが始まる。その最中に暴露しようとした恭介を、starlight のメンバー奏多・紬・将生が止める。事前に恭介の計画を察知した麗人が、止めるよう三人に頼んでいたのだ。麗人と確執があったメンバーだが、麗人の思いを聞き協力することにした。自己PR の最後、麗人はオーディションの辞退、そしてグループ卒業を宣言する。陽太は麗人の決断を尊重することにした。

陽太のクビは撤回され、starlight に戻る。そしていなくなったセンターを務めることに。starlight のメンバーで唯一オーディションに合格した恭介は、starlight のセンターは叶わなかったものの、派生グループのセンターとなった。兼任して活動し実力と人気を得ながら starlight のセンターの座を虎視眈々と狙っている。奏多・紬・将生は、麗人がいなくなったグループを守るため、メンバー全員で切磋琢磨して活動していく。

そして、事務所から新たなアイドルユニットがデビューする。麗人、そしてアイドルに復帰した敦のユニットだ。陽太と麗人は、お互いを目標としてアイドルの道を進んでいくのだった。

「推しの上位互換が僕ですか？」

1 話

仲村 ゆうな

○音楽ホール・ライブ会場内

多くの女性ファンで埋まっている会場。

モニターには、男性アイドルグループ

『スターライト』のMVが流れている。

女1・2、座席でメイク直しをしている。  
る。

女1、会場を見まわし気づいて、

女1「ね、見て。男の人いる。しかも一人」

女2「ほんとだ。珍しい。同性ファンも増え  
てきたんだねえ」

女性客の中、ぽつんと座席にいる影山

陽太（二〇）。

女1「いやでもああいいうのってファンの女の  
子目的の奴も——」

モニターに天上麗人（二〇）のソロパー  
トが映し出される。

陽太「（大声で）麗人——！」

陽太、モニターに向かって麗人の写真  
がプリントされたうちわとペンライト  
を振る。

女1「……ガチのひとだったね」

女2「申し訳ない」

武田 梓（21）、陽太の前の席に来る。

梓「お、陽太くんー。また座席近いね」

陽太「あず姐さん！ お疲れ様です！」

梓「全力で行こう」

梓、バッグからペンライト二本取り出す。

陽太「はい！」

× × ×

ステージ上で踊る今野敦（22）・辻崎

奏多（22）・遠藤紬（20）・三森将生

（20）・天上麗人（18）。

観客「（曲に合わせて）あなたは輝く一番

星！」

陽太「（一緒に）キラキラ輝く一等星！ 私

を照らせスターライト！ 世界を照らせス

ターライト！」

曲が終わり、歓声が上がる。

奏多「今日はみんな来てくれてありがとうー！」

黄色い歓声が上がる。

梓「（陽太の方を向いて）ねえ今日あつくんのビジュ良すぎない？ 良すぎじゃない？」

陽太「はい。麗人くんのビジュも大優勝です」

奏多、敦の方を見る。

敦、真剣な顔をして頷く。

敦「えー、僕からみなさんにお伝えしたいことがあります」

梓「え、何やめて」

敦「僕、今野敦は、スターライトを卒業します」

観客「えー！」

梓、倒れそうになる。

陽太、慌てて後ろから梓を支える。

陽太「しっかり！」

敦「突然の発表でごめんなさい。でも、僕が次のステップに進むために決めたことなので、応援してくれると嬉しいです」

梓「（息も絶え絶えに）そんなん、応援するに決まってんじゃん……」

陽太、涙目で頷く。

奏多「そしてもう一つ、発表があります」

モニターが点く。

ざわつく観客たち。

『新メンバーオーディション開催』の文字が映し出される。

歓声上がる。

奏多「スターライトの新メンバーオーディションの開催が決定しました！」

紬「僕らと一緒にアイドルをしてくれる子を

募集します」

将生「本気で俺らとアイドルやりたって人、ぜひ来てください」

麗人「待ってるよ」

陽太「……目が合った」

陽太、麗人をまっすぐ見つめて、

陽太「はい！」

○美容室・店内

陽太、美容師にスマホを見せる。

スマホには麗人の写真が表示されている。

陽太「こんな感じにしてください！」

○アパート・部屋

麗人と同じ髪色・髪型になった陽太、  
スマホをじっと見ている。

麗人が踊っているライブ映像を繰り返し再生する。

○事務所・会議室

机に並べられた多数の履歴書。  
その中に陽太の履歴書もある。

○街中

街頭モニターにCMが流れる。

『スターライト新メンバーオーディション番組放送決定！』の文字。

○事務所・レッスン室

テレビカメラを向けられている陽太。

陽太「スターライトが大好きで」

○駅

スマホを見ている女子高生たち。

画面には陽太がインタビュを受けている動画が流れている。

○テレビ局・スタジオ

司会者「スターライト新メンバーオーディシ

ョン、合格者は」

陽太、震えながら祈っている。

陽太の隣に立っていた栗田恭介（19）

にスポットライトが当たる。

司会者「エントリーナンバー四〇三二、栗田

恭介！」

歓声上がり銀テープが舞う。

陽太、奏多・紬・将生・麗人が座って

いるひな壇の方を見る。

立ち上がり拍手している麗人。

陽太「麗人くん……」

司会者「そしてもう一人！ エントリーナン

バー五〇〇二、影山陽太！」

陽太にスポットライトが当たる。

陽太「え」

歓声が上がる中、スターライトのメンバーがひな壇から降りて来る。

恭介・陽太の前に立つスターライトのメンバー。

奏多「おめでとう。これからよろしくね」

恭介「はい！」

麗人、恭介と陽太に笑顔を向ける。

陽太「……はい！」

○事務所・会議室（夜）

坂木透（33）・スターライトのメンバー

ー・恭介・陽太が集まっている。

坂木「えー、改めて合格おめでとう。スター

ライトのマネージャーしてます、坂木です」

恭介「よろしくお願いします」

奏多「じゃあ俺らも一応自己紹介しとく？」

紬「うん」

奏多「（咳払いして）さあ行こう！ 宇宙の」

奏多・陽太「奏多へー！」

奏多「敦が抜けて、今はスターライトのリー

ダーしてます。辻崎奏多です」

紬「遠藤でーす」

将生「三森でーす」

奏多「ちよつと！ 二人もいつものやって

よ！」

紬「別にもう同じメンバーになるんだからよ

くない？」

将生「そうそう。取り繕ってもねえ」

紬「（陽太に向かって）もともとファンなん

だって？」

陽太「あ、はい！」

紬「幻想はすぐに捨てた方がいいよ。俺らも  
近くで見れば星じゃなくて人間だから」

陽太「え」

将生「特にあいつのファンならね」

坂木「そういえば麗人は？」

紬「帰った」

坂木「え！ あいつ……」

陽太、慌てて出て行く。

○同・廊下

陽太、走って来る。

麗人の後ろ姿を見つけて駆け寄る。

陽太「麗人くん！」

麗人、立ち止まる。

陽太「あの、僕（と咳き込む）」

陽太、大きく深呼吸する。

陽太「僕、麗人くんのこと大好きで、それで」

麗人、振り返る。

陽太「（ぼそっと）うわかつこいい……」

麗人「俺お前のこと嫌いだから」

陽太「え？」

麗人「大っ嫌い」

麗人、歩き出す。

陽太、膝から崩れ落ちる。

○マンション・リビング（夜）

恭介・陽太、キャリーケースを持って  
入って来る。

恭介「寮まで用意してくれるなんてねー。助  
かる」

恭介、陽太に手を差し出す。

恭介「改めて、新メンバー同士よろしく。頑  
張って行こう」

陽太、恭介の手を取ろうとしてそのま  
ま床に崩れ落ちる。

恭介「え！ 何？ どうしたの！ 大丈夫？」  
陽太「もう生きていけない……」

恭介「え？ 何で？ 何でそうなったの？」  
陽太「大っ嫌いって。目を見て、言われたん  
です。大好きは目が合ったことないのにい」

×  
×  
×

陽太、大きな音を立てて鼻を嚙む。

恭介、陽太にティッシュを渡す。

陽太「（しゃくりあげながら）嫌われるようなことしちゃったんですかね」

恭介「……陽太くん最近SNSとか見てた？」

陽太「いえ、オーディション中は見れてなくて」

恭介、スマホを操作して陽太に差し出す。

陽太「これ、何ですか」

画面には『完全に陽太は麗人の上位互換』と書かれた投稿。

多くのいいねが集まっている。

陽太「僕が麗人くんの上位互換？ そんなわけないじゃないですか！」

恭介「陽太くん、格好だけじゃなくて歌い方とか踊り方も麗人さんの真似してるよね」

陽太「はい。僕の中ではもう最高のアイドル  
といえば麗人くんなので！」

恭介「それが最近麗人さん調子悪いみたいで。パフォーマンズが落ちたって言われてる」

陽太「え！」

恭介「バラエティで態度悪いとかも言われるようになったし。（小声で）あとは熱愛とか」

陽太「熱愛？」

恭介「そんなときに、見た目もパフォーマン  
スも麗人さんに似てる陽太くんが出てきて。  
本人より好青年と来たもんだから、ファン  
の間では上位互換だって言われてる」

陽太「そんな……。じゃあ麗人くんが僕を嫌  
ってるのって」

恭介「下位互換って言われたら、そりやむか  
つくだろうね」

陽太「僕辞退します」

恭介「は？」

陽太「僕のせいで麗人くんが嫌な思いしてる  
んだったら僕なんて」

恭介「いやいや待ってよ。合格して即脱退な

んで、スターライトに迷惑かかるでしょ」

陽太「でも」

恭介「もっと麗人さんに嫌われるよ」

陽太「それは嫌です！」

恭介「でしょ？　ね、落ち着いて」

陽太「はい……」

○テレビ局・撮影スタジオ（朝）

ワイドショーの撮影中。

アナウンサー「スターライトのみなさんがスタジオに来てくれましたー」

スターライト「おはようございます！」

アナウンサー「昨日発表された新メンバーの

お二人も来てます！」

恭介「おはようございます。福島県出身、十九歳の栗田恭介です」

陽太「東京都出身、十八歳の影山陽太です」  
アナウンサー「改めて、合格おめでとうございます！　合格発表生放送では多くの感動を呼びましたね」

恭介「ありがとうございます」

陽太、麗人をチラッと見る。

眠そうにあくびをしている麗人。

アナウンサー「新メンバーの陽太くんはある  
ことでネットで話題になっていたんですが、  
スタジオの皆さん、知ってますか？」

陽太「え」

コメンテーター「麗人くと似てるよねえ！」

アナウンサー「そうなんです！　メンバーの

麗人くとそっくりなことで注目を集めて

たんです！」

陽太「あ、あの」

アナウンサー「見た目だけじゃなくて歌い方  
や踊り方もそっくりなんですよね」

麗人「そうですね。パクリ野郎ですね」

アナウンサー「え」

奏多「……あはは！　なんちゃって！」

○同・楽屋

坂木「おい麗人！　なんだよさっきのは！

生放送なんだから発言には気を付けろ！」

紬「（スマホを見ながら）麗人口悪い、あくびすんな。うわあ、タイムライン荒れてる」

奏多、紬のスマホを奪う。

奏多「やめなさいって」

麗人「こんな朝早くから愛想よくできないですよ」

坂木「お前昨日も遅くまで遊んでたのか」

将生「そのうち未成年飲酒とか出てきそう」

坂木「勘弁してくれよ……」

顔を見合わせる陽太と恭介。

坂木「新メンバーの二人はよかったよ。初めてにしてはいいデビューだったんじゃない」

恭介「ありがとうございます！」

麗人、舌打ちして出て行く。

坂木「おい、麗人」

陽太「あ……」

○事務所・レッスン室

床に突っ伏している陽太。

恭介「陽太くん。それ何のストレッチ？」

陽太「やっぱり俺辞めます……」

恭介「麗人さんに近づくために頑張ったんでしょ？」

陽太「こんなだったら推しに認知されてないままの方が幸せだった。好きでも嫌いでもない、交わらない関係性のままでよかった」

恭介「陽太くん……」

奏多・紬・将生、入って来る。

紬「お、さっそくギャップにやられた？」

三宅蘭（ラン）、入って来る。

一同「おはようございます！」

蘭「……あんなたちが新メンバー」

恭介「あ、はい！ よろしくお願いします！」

蘭「舐めたステップ踏んだら、許さないよ！」

蘭、スマホで曲を流す。

曲に合わせて踊るメンバーたち。

蘭「ふうん……」

曲が終わる。

蘭「やるじゃない。新人たち」

恭介「ありがとうございます」

陽太「いやそんな。僕なんて、未経験なので」

奏多「本当に？」

紬「てかマジで麗人と似てる」

将生「カウントの取り方とかね」

紬「今の麗人より上手いんじゃない？」

陽太「そんなこと絶対じゃないです！」

将生「さっすが上位互換」

奏多「おい！　こんなの麗人に聞かれたら」

麗人、入って来る。

蘭「重役出勤ね」

奏多「すみません！　ちゃんと時間は伝えて

たんですけど」

紬「また夜遊びでしょ」

蘭「あんたさあ、その態度で舐めたダンスし

たら超ダサイからね」

麗人、舌打ちする。

×  
×  
×

曲に合わせて踊るメンバーたち。

麗人、踊りながら横目で陽太を見る。

○同・更衣室

陽太「はあ……。やっぱり麗人くん最高」

恭介「それ麗人さんに言った？」

陽太「ううん。やっぱり本人目の前にすると緊張しちゃって」

恭介「絶対言わない方がいいよ。今は嫌味になっちゃうから」

陽太「ええ？」

坂木、入って来る。

坂木「お疲れ様。どうだった初めてのレッスンは」

恭介「みなさんに追いつけるように頑張ります」

坂木「二人のメンバーカラー決まったよ」

恭介「ほんとですか！」

坂木「社長が二人のイメージで決めてくれた」

陽太「アイドルっぽい……！」

坂木「恭介はパープル」

恭介「紫。ほう、なるほど」

坂木「天才肌っぽいからだって。で、陽太は

白」

陽太「白……」

坂木「理由は特に言っていなかったけど、とにかく白だって」

恭介「何色にでも染まれるからとかじゃないですかね」

坂木「かもね」

○繁華街（夜）

キャップを深く被った麗人、周囲を気にしながら歩く。

カメラのシャッター音。

○事務所・会議室

あくびをする麗人。

陽太、麗人を心配そうに見る。

坂木「さて、明日はいよいよ新体制お披露目  
ミニライブだ！」

奏多「ライブの後は握手会もあるから、みんな頑張ろうね！」

紬「はい」

奏多「特に新メンバーの二人」

陽太「あ、はい！」

恭介「みなさんの足を引っ張らないように頑張ります」

将生「謙虚だねえ、恭介は」

紬「俺らのファン奪ってやるくらいの気持ちで行かなきゃ」

恭介「そんなそんな」

紬「麗人は気が気じゃないだろうね」

麗人「あ？」

紬「陽太にファン流れてるんじゃない？」

奏多「紬、やめなさい」

紬「ねえどんな気持ち？ 下位互換になって」  
麗人「てめえ！」

奏多「やめなさいって二人とも！」

陽太「何でこんなことに……。つむれいはち  
よつと意地悪な紬くんが弟分の麗人くんを  
可愛がってたじゃないですか」

将生「あー、なんかファンの間でつむれいコ  
ンビって人気だったよね。今じゃあんなだ  
けど」

奏多「お前らあんな仲良かったのに喧嘩ばっ  
かりして！」

紬「アイドル舐めてる奴と仲良くなんてでき  
ませーん」

麗人「そのキャラ、年齢的にきついんじゃない  
えの？」

取っ組み合いを始める麗人と紬。

奏多「やめろ！」

奏多・坂木、麗人と紬を止める。

将生「顔は傷つけないようにねー」

陽太「あわわわわわ」

○マンション・リビング（夜）

洗濯物を畳む陽太と恭介。

恭介「楽しみだねー、明日」

陽太、ため息をつく。

恭介「緊張してる？」

陽太「それもありますけど……。やっぱり俺

麗人くんのために辞めた方が」

恭介「まだ言ってるの」

陽太「だって！ あんなに温厚でかわいい弟  
キャラだった麗人くんが、あんな口悪くな  
るなんて」

恭介「今は余計なこと考えないで、明日のラ  
イブを成功させることだけに集中しよ」

陽太「はい……」

恭介「明日は初めてファンの前に立つんだか  
らさ」

陽太「僕、大丈夫ですかね？」

恭介「何が？」

陽太「恭介くん、SNSで僕って」

恭介「ああ。陽太くんは」

恭介、スマホを手取る。

陽太「やっぱりいいです！」

恭介「うん？」

陽太「僕殺害予告されてますよね？」

恭介「はい？」

陽太「キモオタが調子乗んとか、麗人くんから離れろとか、罵詈雑言の嵐ですよネ」

恭介「ファンは」

陽太「わー！」

陽太、耳を塞いで寝室に駆け込む。

恭介「なんだあいつ」

○ライブハウス・入口前

女性ファンが続々と集まって来る。

○同・楽屋

白色の衣装に着替えた陽太、鏡の前に立っている。

陽太「わあ……」

オレンジ色の衣装姿の紬、鏡を覗き込む。

紬「白かあ。予想では赤だったんだけど」

陽太「敦くんの色じゃないですか」

青色の衣装姿の奏多、入って来る。

奏多「ヘアメ終わった？」

鏡の前で前髪を直している恭介。

紫色の衣装を着ている。

奏多「恭介は紫かぁ。いいね」

緑色の衣装姿の将生、恭介の隣に座る。

将生「黄緑だと思ってた」

恭介「将生さんの弟っぽくなっていいですね」

紬「いやいや似た色ってきついよ？ 自分の

色のペンライトだと思ったら、よく見りや

別のメンバーのでしたって、がっかり度や

ばいよ」

ピンク色の衣装を着た麗人、入って来る。

紬「ピンクと赤とか」

陽太「今日もビジュが良い……」

坂木、入って来る。

坂木「はい、スタンバイ」

○同・会場内

照明が落ち、歓声が上がる。

ペンライトを点けるファンたち。

曲が始まり、ステージにメンバーが出て来る。

奏多「新体制一発目のライブ、ぶち上っていいーぜー！」

歓声が上がる。

うつむいていた陽太、恐る恐る顔を上げる。

目の前にはペンライトの光が広がっている。

陽太「（ぼそっと）こう見えてたんだ……」

ペンライトの光はピンク色が多く、他は青、オレンジ、緑色がある。

恭介、青色のペンライトを持ったファンに向かって投げキスする。

ファン「キヤー！」

○同・楽屋

スタッフ「握手会準備出来ましたー。お願いします」

坂木「メンバーは一行に並んで、お客さんが流れていくシステムだから」

陽太「あのボディガードとかって」

奏多「よし、頑張ろー！」

坂木・奏多・紬・将生、出て行く。

麗人、陽太をチラッと見てから出て行く。

恭介、陽太の肩を叩く。

恭介「心配しなくて大丈夫。行こ」

陽太「いざとなったら守ってくださいか？」

恭介「はいはい」

○同・会場内

スタッフがファンを整列させる。

スタッフ「スタッフの指示に従って進んでくださーい」

横一行に並ぶメンバーたち。

陽太「うう……」

恭介、陽太を見て笑う。

ファンが並び、次々とメンバーたちと握手していく。

女1、陽太の前に立つ。

ハッと息をのむ陽太。

女1「あの、陽太くんってライブよく来てましたよね。麗人のうちわ持って」

陽太「え、あ、はい。ごめんなさー」

女1「めっちゃ成功したオタクじゃん！」

陽太「へ？」

女1「応援してる！」

スタッフ「お時間でーす」

スタッフ、女1を移動させる。

女2、陽太の前に立つ。

陽太と握手をして、

女2「同じファンとして誇りに思います！」

陽太「ありがとうございます？」

女2「努力家なところが超推せる！」

女2、移動する。

次々と陽太と握手するファンたち。

ファン「合格おめでとう！」

ファン「これからも頑張って！」

ファン「陽太くんみたいな人がスタライに入ってくれてよかった！」

次々と入れ替わるファンと握手する陽太。

陽太「あ、ありがとうございます！　ありがとうございます！　ありがとうございます！　あ、あわわ……」

麗人、ファンの方を見ず陽太を睨みつけている。

全身ピンク色の服装のファン、陽太の前に立つ。

陽太「ありがとうございます」

ピンク色のファン、陽太の手を強く握る。

ピンク色のファン「もう私陽太くんに目が釘付けになっちゃった！」

陽太「ありがとうございます」

ピンク色のファン「もう推し！　私陽太くん推し！　今日帰ったらこの服漂白するね！」

陽太「ええ！」

麗人、陽太の方を見る。

○ワゴン車内（夜）

運転している坂木。

助手席には麗人。

二列目には陽太・奏多・恭介。

最後列には紬・将生が座っている。

陽太「推しているときも思ってたけど、やっぱりスターライトのファンって民度高いですね」

将生「あんま意識したことはなかったけど」

紬「過激なものたまにいるけどねー」

陽太「僕なんかのこゝろを受け入れてくれて。

心が広いです」

恭介「心配しなくて大丈夫って言ったでしょ。ほら」

恭介、陽太にスマホを見せる。

画面にはSNSが表示されている。

『陽太くん推せる』『ファン代表みた

いな子が入ってくれてよかった』『これからが楽しみ』など陽太を称賛する投稿が多数されている。

陽太「僕なんかが……」

恭介「ネットでは合格者予想第一位は陽太くんだったよ」

紬、身を乗り出す。

紬「新体制のペンライトが発売されたら会場

真っ白に染められちゃうんじゃない？」

陽太「まさかそんな」

紬「今日はやらしいまっピンクだったけどさ。

ぶっちゃけみんな陽太くんのメンカラのつ

もりで付けてた説あるよね」

麗人、舌打ちする。

奏多「何でお前はそういうこと言うんだよ」

恭介「（ぼそっと）ま紫もいやらしいか？」

将生「恭介何か言った？」

恭介「（笑顔で）いえ何も」

麗人「……坂木さん、ここで降ろして」

坂木「まだ全然家じゃないだろ」

麗人「用事あんの」

○繁華街（夜）

ワゴン車が停車する。

麗人、ワゴン車から降りてくる。

坂木、麗人に向かって、

坂木「おい麗人！ 変なことするなよ！」

○ワゴン車内（夜）

紬「これ以上俺らに迷惑かけないでよね」

陽太、心配そうに窓の外を見つめる。

○繁華街（夜）

坂木「変な人間とも関わらないこと！」

麗人「うるさいな」

麗人、歩いていく。

○マンション・リビング（夜）

恭介「麗人さんやばいね」

陽太「はい、やばいです。やっぱり麗人くん

のとりけるような歌声、唯一無二のターン  
のきれいさはばいです」

恭介「ああ、そっち……」

陽太「今まで何百メートルと離れていたのに、  
あんなに近くで麗人くんが見れるなんて」

× × ×

（フラッシュ）

麗人のすぐ隣で踊る陽太。

× × ×

陽太「すごいところまで来ちゃった……」

恭介、ため息をついてスマホを見る。

画面にはSNS。

『まるひです』というアカウント名で

『明日顔面優勝人気アイドル週刊誌』

と投稿されている。

○繁華街（夜）

麗人、フードを深く被った男と対峙する。

財布から万札を取り出し、男に渡す。

男から大きな紙袋を受け取る。

#### ○事務所・会議室

恭介・陽太、入って来る。

恭介「おはようございまー」

坂木、机を力強く叩く。

坂木「どういふことなんだ！」

恭介と陽太、顔を見合わせる。

座っている麗人の前には週刊誌が置いてある。

坂木「変なことするなって言ったよな。変な人間とは関わるなって言ったよな」

麗人「これは」

坂木「言い訳はいい！」

恭介、週刊誌を手取る。

恭介「何これ」

陽太、恭介が持つ週刊誌を覗き込む。

週刊誌には『スターライト天上麗人深夜の徘徊！ 不穏な交友関係』と題されて記事が載っている。

恭介「（記事を読み上げて）深夜の繁華街で何をしていたのか。最近は芸能界でも事件が」

麗人「だから！ 俺は何もしてないって！」

坂木「信じられるわけないだろ。普段のお前の態度で」

坂木、麗人の肩に手を置きまっすぐ見つめる。

坂木「なあ麗人。お前どうしちゃったんだよ。

お前、そんな奴じゃなかっただろ……」

麗人、黙って坂木を睨みつける。

坂木「何があったんだよ」

麗人、坂木の手を振り払い出口に向かう。

目が合う陽太と麗人。

麗人、陽太に肩をぶつけ出て行く。

○同・レッスン室

坂木・スターライトのメンバーが集ま  
っている。

坂木「というわけで、記事が出た」

紬「いつかこうなるんじゃないかって思った  
んだよね」

将生「時間の問題だったね」

奏多「やめなさいお前ら。でも別に麗人が何  
か悪いことしたって決まったわけじゃない  
んですよね？」

坂木「うん。週刊誌としては熱愛とか撮りた  
かったんだろうけど、撮れなかったからと  
りあえず夜遊びの記事にしたんだろうな」

紬「もうさあ、麗人辞めさせたら？」

陽太「え」

奏多「何言ってるの紬」

紬「だってさあ、麗人ってセンターでうちの  
顔じゃん？　こんなんだったらスターライ  
トのイメージも悪くなるし」

将生「分かる」

奏多「将生まで」

将生「確かに麗人が加入してからスターライ  
トは人気になったよ。でも今は、足引っ張  
てるだけじゃない？」

奏多「そんな——」

陽太「そんなことありません！」

紬「何」

陽太「麗人くんは、いつだって僕らを照らす  
星で、麗人くんがいるから、僕らは暗闇の  
中でも上を向けて」

紬「それ、ファンとしての意見？ それとも  
アイドルとしての意見？」

陽太「僕は……」

紬「だからファン入れるの嫌だったんだよな  
あ。甘いから」

奏多「お前言っていることと悪いことがある  
ぞ」

紬「敦なら分かってくれたよ」

奏多「敦って。俺だって……」

坂木「とりあえずお前たちも十分気を付けて

くればばいいから。どこで記者が張ってるか分からないし」

奏多「はい」

坂木「麗人については……。事務所で話し合うから」

陽太「え」

坂木、出て行く。

陽太「麗人くん……」

恭介、目を閉じ「うんうん」と頷いている。

将生「恭介？　どうした？」

恭介「ちよつとシミュレーションを。いえ、何でもありません」

OCD ショップ・店内

マスクを付けた陽太、店内を回っている。

スターライトのCDコーナーの前で立ち止まる。

CDを手に取り見つめる。

○（回想）学校・教室

学生服姿の陽太、教師と向き合ってる。

教師「進路希望調査、出してないのお前だけだぞ」

陽太「すみません」

教師「進学でも就職でも。何かやりたいことないの？ 夢とかさ」

陽太「僕なんかが夢を追うってのもおこがましいっていうか」

教師「じゃあなんか好きなものとか。夢中になれるもの」

陽太、首をかしげる。

○CDショップ・店内

電話しながら店内を歩く陽太。

陽太「（電話口に）うん。母ちゃんが言ったCDあったよ。うん、買って帰る。おつり？ 好きなもの買っていいって言われたって」

陽太、ふと小さなコーナーを見つける。  
そこにはスターライトのCDが並べられて  
いる。

CDを手にする陽太。

DVDプレーヤーでスターライトのM  
Vが流されている。

麗人のソロパートが映る。

麗人の映像をまっすぐ見つめる陽太。

○（戻って）CDショップ・店内

陽太、大きなモニターを見つめる。

スターライトのMVが流されており、

麗人のソロパートが映る。

女3・4、歩いてくる。

女3「この間のライブで陽太くん見て来たよ」

陽太、慌ててCDラックの陰に隠れる。

女4「撮影オッケーだったんでしょ？ 見せ

て」

女3「あ、SNS投稿もオッケーだったから  
流しといた」

女4「（スマホを見て）あー、これね。はいはいはい」

女3「言いたいこと分かる？」

女4「分かる」

陽太、女3・4をチラチラ見てスマホを操作する。

この間のライブ動画の投稿を見つける。  
動画を再生すると、並んでパフォーマンスする麗人と陽太が映されている。

一挙一動がシンクロしている麗人と陽太。  
太。

陽太「こんなに？」

女3「これだったらまあ陽太くん選ぶかなあ」

女4「スキャンダル無い方だね」

女3「推しが途中でいなくなるとか悲しすぎるし」

女4「それなー」

陽太「僕が、麗人くんの真似をしたせいで」

陽太のスマホに『坂木さん』から電話の着信。

陽太「うわぁ！」

陽太、慌てて電話に出る。

陽太「はい」

坂木（電話）「ちよつと事務所来れる？」

○事務所・廊下

坂木「ごめんね、休みなのに」

陽太「いえ。あの、何か？」

坂木「ちよつと社長が呼んでる」

陽太「え！ 数々のトップアイドルの生みの

親、世界の創造主が？」

坂木「ファンの間ではそう呼ばれてるみたい

だね」

陽太「究極のアイドルを育て上げる分、タレ

ントには鬼厳しいって聞いたことがあります。

え、僕何かしましたか？」

坂木、黙ったまま微笑む。

陽太「え？ 坂木さん？ ちょ、笑ってごま

かさないで！」

坂木、微笑んだまま。

○同・社長室

ノックの音。

坂木の声「社長、失礼します」

坂木・陽太、入って来る。

坂木「陽太連れて来ました」

背を向けて椅子に座っている園田千草

(66)。

陽太「(声が裏返って)初めまして影山陽太です」

千草、ゆっくりと振り返る。

陽太「神様……」

ソファに座っている麗人。

陽太「(麗人に気づいて)最高傑作とおられる……」

千草「陽太くん」

陽太「は、はい！」

千草「あなたは、白が似合うわね」

陽太「え？ あ！ その節はメンバーカラーを決めていただきありがとうございます」

千草「うん。で、麗人はやっぱりピンクが似合う」

陽太「分かります！」

麗人「俺ピンク嫌いなんだけど」

陽太「ピンクのペンライトが会場中に広がる  
と、まるでみんな麗人くんに恋したような」

麗人「キモ」

千草「その通り。麗人は恋の色、ピンクにしたの。麗人には、その美貌とパフォーマンスで多くの人を引き寄せる魅力がある」

千草、麗人を立ち上がらせ、陽太の隣に立たせる。

千草「ピンクと白が混ざったら、何色になる  
と思う？」

麗人「はあ？」

陽太「えっと、薄ピンク？」

千草「そう、薄まっちゃうのよ」

陽太「そう、ですね？」

千草「それぞれの色が十分に発色しないの。  
だから」

眉をひそめている坂木。

千草、麗人と陽太の顔を見て、

千草「麗人、陽太。二人のうちどちらかと契約を切ります」

麗人「え？」

陽太「クビってことですか？」

千草「アイドルってね、いろんなのがいるからみんな夢中になるの。それぞれが唯一無二じゃなきゃいけないのよ。だから麗人と陽太、似たようなのは二人もいない」

麗人「そんな……」

陽太「僕が辞めます！」

麗人「は？」

陽太「僕が辞めれば麗人くんはクビにならないですよね？」

坂木「陽太、落ち着いて」

坂木、陽太の肩に手を置く。

陽太「お願いします！」

陽太、頭を下げる。

陽太「麗人くんは、アイドルでいなきゃいけ

ないんです！ 麗人くんがアイドルでいてくれるだけで、それだけの人が救われてるか。だから――」

麗人、陽太の胸ぐらを掴む。

坂木「麗人！」

麗人「情けのつもりか？」

陽太「僕は」

麗人「舐めんじゃねえよ！」

麗人、陽太を床に突き飛ばす。

麗人「俺には俺のプライドがあるんだよ！」

千草「そうね。アイドルはプライド持ってや

っていくべき」

陽太「社長、でも」

千草「今後の活躍を見て、どちらがよりうちのアイドルとしてふさわしいか、見させてもらうわ」

麗人「見せてやるよ」

麗人、千草を睨みつける。

千草「楽しみにしてる。あなたが実力で勝てるのか」

麗人、出口に向かう。

○同・廊下

ドアに耳を当てていた恭介、慌ててドアから離れる。

麗人、飛び出してくる。

坂木の声「おい麗人！」

陽太、慌てて飛び出してくる。

陽太「麗人くん！」

陽太、麗人を追いかける。

恭介、目を閉じ「うんうん」と頷く。

恭介「（目を開き）いける」

○同・社長室

坂木「これで麗人もやる気出しますかね」

千草「輝きを失った麗人に燃料を投下して、

それでも燃えなければ切るまでよ」

坂木「本当にクビにするんですか？ 軽くお

灸をすえるためにおっしゃったのかと」

千草「だってそっくりじゃない、あの二人」

坂木「まあ、そうですけど……」

千草「より優れた方を、うちには残す。そう、  
上位互換をね」

○同・廊下

陽太、麗人を追いかけている。

陽太「待って！　麗人くん！」

麗人、立ち止まり振り返る。

麗人「俺お前のこと嫌いだから」

陽太「また目が合った……」

麗人「絶対負けないから」

陽太「かっこいい……。っていうかあの、僕

麗人くんに勝てるなんて思ってますん！」

麗人「何だよ！　勝つ気で来いよ！」

陽太「だって僕なんて」

麗人「お前俺の上位互換なんだろ？」

陽太「僕はそんなつもりなかったんです。た

だ、麗人くんに憧れて、麗人くんになりた  
くて」

麗人「それで俺の真似？　気持ち悪い」

陽太「すみません……」

麗人、舌打ちする。

陽太「だから、僕辞めます」

麗人「何でそうなるんだよ」

陽太「だって麗人くんの邪魔になるんだっただって、僕はアイドルなんてできません」

麗人「それでいいのか、お前は」

陽太「だって僕は麗人くんのためだったら」

麗人「俺のために辞めるとか、いらねえんだよ。俺は、自分の力で生き残ってみせる。」

お前をクビにしてな」

麗人、歩いていく。

陽太、麗人の背中を見送る。

○マンション・リビング（夜）

床に突っ伏している陽太。

恭介、カップ麺を二つ持ってくる。

恭介「陽太くーん、食べよー」

陽太「僕はもうしたらいいんでしょう」

恭介「何が？」

陽太「僕は麗人くんのためなら何でもしたいのに、でもそれは麗人くんを喜ばせられなくて」

恭介「うんうん」

陽太「しんどいです」

恭介「麗人さんのクビを繋ぐために陽太くんが辞めるのは違うもんねえ」

陽太「何で知ってるんですか」

恭介「あー、坂木さんから聞いた」

陽太「僕は麗人くんのために何をすればいいでしょう……。スキャンダル起こしてクビになったらいいでしょうか」

恭介「絶対やめて？　いろんなところに迷惑かかるから」

陽太「もうどうすればいいですかー……」

陽太、クッションに顔をうずめる。

恭介「流れに身を任せちゃえばいいと思うけど」

陽太「そしたら麗人くんがクビになっちゃうかもしれないじゃないですか！」

恭介「だからあ。……ちょっと待って」

恭介、目を閉じうんうん頷く。

陽太「恭介くん？」

恭介、目を大きく開く。

陽太「あの？」

恭介「陽太くん。麗人さんを救えるのは君しかいないよ」

陽太「え？　どういうことですか？」

恭介「麗人さんって今、自分の見せ方を分かってない状態だと思うんだよね。やる気がなく見えたり不愛想に見えたり。あれじゃファンは離れて行くよ」

陽太「はい……」

恭介「そこで！　陽太くんだよ」

陽太「僕なんかが役に立ちますか？」

恭介「陽太くんだったら、ファンがどんな麗人さんを見たいか分かるでしょ？」

陽太「どんな……」

恭介「陽太くんは、どんな麗人さんが見たい？」

陽太「僕は……」

× × ×

（フラッシュ）

CDショップで麗人が映るMVを見つ  
めている学生服の陽太。

× × ×

陽太「僕はみんな照らしてくれる、麗人くん  
が見たいです！」

恭介「そうだ、その意気だ！ いい？ 陽太  
くんが同じグループで活動しつつ、麗人さ  
んを支えるんだ」

陽太「僕にできるでしょうか……」

恭介「やるんだよ！ 麗人さんに恩返し、し  
たくないの？」

陽太「したいです！」

恭介「うん。陽太くんのおかげで勢いが戻れ  
ば、麗人さんも陽太くんのこと認めてくれ

るんじゃないかな」

陽太「本当ですか？」

恭介「うん。大好きって言うってくれるかも」

○（回想）音楽ホール・ライブ会場内

陽太、『大好きって言って』と書かれ  
たうちわを振っている。

陽太「麗人くーん！」

ステージ上の麗人、陽太とは逆の方向  
を向いて、

麗人「大好きだよー！」

大きな歓声上がる。

○（戻って）マンション・リビング（夜）

陽太「僕、頑張ります！ 特大のファンサも  
らうために！」

恭介「そうそう。それでいいんだよ」

恭介、ニヤツと笑う。

○繁華街（夜）

歩いている麗人。

ふと、ビルの窓に反射した自分の姿が目に残る。

じっと自分の姿を見つめる。

マンション・陽太の部屋（夜）

大量の麗人のうちわやポスターで埋め尽くされた部屋。

陽太、麗人のうちわを見つめて、

陽太「任せて、麗人くん」

【続く】